

和漢文学比較からみた末摘花の人物造型

張 媛媛

§ はじめに

§1. 末摘花の「醜的」描写

§2. 「醜女」における美的描写

§3. 「賢女伝」との人物造型比較

§ おわりに

梗概

本論は中国古典文学と比較しながら、『源氏物語』における末摘花の人物造型について論述する。第1章では末摘花巻における末摘花の容貌描写を分析し、唐代に至る中国古典文学における醜貌描写と比較し、両者が類似している部分をまとめ、末摘花の異様な風貌が中国古典文学との共通性を論じる。第2章では主に物語史上における髪描写をまとめ、『源氏物語』の本文を辿りながら、末摘花の髪の意味について論じる。

第3章では、蓬生巻の描写と中国古典文学における「賢女」の話とを比較し、末摘花の物語と中国古典文学における「賢女」の話には共通性があることをまとめる。そのような「賢女」の話のパターンと対照し、末摘花巻と蓬生巻間の人物造型における描写方法の変容を論じる。

まとめると、末摘花の物語は中国古典の物語と共通性があり、その共通性をまとめ

ながら、末摘花の物語を一貫性を持つように解説する。

キーワード：源氏物語，末摘花，醜女，賢女，髪描写

はじめに

末摘花はベニハナ（紅花）の異称であり、「なつかしき色ともなしに何にこのすゑつむ花を袖にふれけむ」（末摘花 300頁）¹という源氏の歌が末摘花巻の由来である。この巻に登場する女性は、鼻の先端が赤いので末摘花という花の名前をつけられたのである。鼻以外にも、彼女の異様な容貌の描写は本文を見る通り明らかである。末摘花巻における末摘花の異様な風貌に注目する研究は多い。蔵中しのぶ氏は色、体型、鼻などの面から末摘花と観普賢経経文の描写の類似をまとめ、作者は「直接的に観普賢経に依拠した可能性がたかい」²と指摘した。そのほかに、今井智子氏「『源氏物語』における末摘花の造型—金剛醜女説話の受容について—」（『和漢比較文学』第52号、2014年）と竺銀児氏「『源氏物語』蓬生巻「心憂の仏菩薩」を読む—末摘花巻「普賢菩薩の乗物」との関わりをめぐって—」（『表現技術研究』第14期、2019年）は仏教説話

との関わりから末摘花の人物造型（人物像、登場人物の設定を指す）を論じた。

また、『源氏物語』以前の日本文学を見ると、醜貌にふれた作品もあるが、具体的な醜貌、特に女性の醜貌の描写は少ない。永井和子氏は末摘花の容貌から末摘花の異質性を探った。

外来人を積極的に迎え入れた当時、異文化の遭遇は当然あったものであろう。この末摘花の造型は、単に文献記述上の異質性のみではなく、なんらかの具体的な異国のイメージを組み合わせたのではないだろうか。³

唐代までの中国古典文学には、醜貌の描写がかなり豊富である。そして、末摘花は末摘花巻では異様な風貌を持ち、内気であるように描かれているが、蓬生巻では貧しさの中に源氏を待ち続ける誠実さが中心として語られている。すなわち、末摘花は単なる「醜女」ではないことがわかる。そのような人物造型は中国の「賢女」の話のパターンと類似している。漢籍からの影響論の先行研究では、『列女伝』をはじめ、中国古典文学における「醜女」かつ「賢女」というような物語を末摘花の話と比較する論考が多い。

新聞一美氏は「源氏物語の女性像と漢詩文—帚木三帖から末摘花・蓬生巻へ」（『中古文学と漢文学Ⅱ』所収 汲古書院、1987年2月）において、主に帚木三帖と末摘花巻・蓬生巻について白楽天の諷諭詩の引用を中心として述べている。それに対して、田中隆昭氏は『列女伝』の「鍾離春」「宿瘤女」「孤逐女」と『世説新語』の「賢媛」にある「醜女」かつ「賢女」である中国古

典での例を提示し、「末摘花巻で醜女ぶりがリアルに表現されているのが、中国の『列女伝』などの醜女が賢女であるという話の型にそった展開をしたと考えてよいであろう」⁴と指摘した。

いずれも比較文学的視点からの好論であるが、本文における容姿描写または人物造型の詳しい比較は少ない。この点について、研究の余地があると考えられる。本稿は以上の論述を踏まえ、より幅広く中国古典文学における醜貌描写また「賢女」の話を取り上げ、末摘花の物語と比較し、末摘花の人物造型を論じる。

そして、『源氏物語』以前の日本の作品の醜貌描写と中国古典文学における醜貌描写はいずれも、醜い容姿をひたすら醜く描写するが、末摘花の髪は極めて美しい。これは大きな相違点である。また、蓬生巻に至ると、異様な容貌の描写が省筆され、髪が容貌描写の中心となっている。なぜ作者は美しくない容貌と美しい髪を持つ相反する女性像を作ったのか、末摘花の髪はどのような意味を持っているか、検討する必要があると思う。

『源氏物語』における髪について、今までの先行研究はかなり多い。神尾暢子氏は「源氏物語における美的素材毛髪は、光君と愛人の女君との男女関係を、使用場面と美的語彙との異同によって、巧妙に表現しわけていたことになる」⁵と論じた。また、吉井美弥子氏は「『源氏物語』において、髪とは、それを『見る人』あるいは『ふれる人』の近接したきわめて主観的なまなざしによって語られるもの」⁶と指摘した。三田村雅子氏は、吉井美弥子氏の論を挙げ

た上で、以下のように論じた。

美しい長い髪の女君の類型的物語は、源氏物語によって、かげりも欠落もある揺らぎの髪の物語へ、さらに外からのまなざしにあらがう「うちやられた」髪の物語へ、そして髪の自己意識の物語へと、さまざまに異化され、そのつど生命を吹き込まれてきた。源氏物語は「髪」によって、女の〈身体〉の意味を汲み上げ、奪い返す物語となっているのである。⁷

本稿は各巻の本文と物語の展開をたどりながら、末摘花の髪の意味について探究する。

1. 末摘花の「醜的」描写

末摘花巻における末摘花の醜貌描写の特殊性を探求するために、『源氏物語』以前の日本文学また末摘花巻におけるほかの女性の描写との比較が不可欠と考え、続いては『源氏物語』におけるほかの女性の容貌描写及び『源氏物語』以前の日本文学における醜貌描写を確認したい。更に末摘花の容貌描写を、中国古典文学の醜貌描写と比較し、末摘花の容貌描写の特殊性を考察したい。

1.1 末摘花巻における末摘花の醜貌描写

まず、末摘花巻における末摘花の容貌描写の場面を詳しく分析し、同巻のほかの女性の描写と比較した上で、末摘花の風貌を捉えたい。

源氏は亡くなった夕顔のことを忘れられず、夕顔のような親しみやすく心優しい女

性を探した。その時、大輔命婦は常陸宮の姫君の噂話を持ち込んだ。末摘花の容貌ついて、「心ばへ容貌など、深き方はえ知りはず」（末摘花 267 頁）と大輔命婦が源氏に紹介する言葉がある。その時命婦は末摘花の容貌の異様をある程度知っているが、巧妙に言い表した。源氏はさっそくその夜に末摘花の邸に忍び訪れ、彼女の琴を聞く。「昔物語にもあはれなることどももありけれなど」（末摘花 269 頁）と末摘花の姿に興味を持つようになった。ところが、末摘花は世間知らずであり、春・夏が過ぎ、秋になっても源氏に応答しなかった。それに対して、源氏は苛立ち、命婦を促し、ようやく末摘花と契りを交わした。それ以後、源氏は朱雀院への行幸の準備で忙しくなり、末摘花の邸へ足を運ぶのは自然に少なくなる。ようやく冬の夜末摘花のもとへ訪れ、その翌朝、雪の明かりではじめて末摘花の正体を見た。その場面の描写は次のようである。

まづ、居丈の高く、を背長に見えたまふに、さればよと、胸つぶれぬ。うちつぎて、あなかたはと見ゆるものは鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂りて色づきたること、ことのほかにうたてあり。色は雪はづかしく白うて、さ青に、額つきこよなうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、おほかたおどろおどろしう長きなるべし。瘦せたまへること、いとほしげにさらほひて、肩のほどなど、痛げなるまで衣の上まで見ゆ。何に残りなう見あらはしつらむと思ふも

のから、めづらしきさまのしたれば、さすがにうち見やられたまふ。頭つき、髪のかかりはしも、うつくしげにめでたしと思ひきこゆる人々にもをさをさ劣るまじう、褂の裾にたまりて引かれたるほど、一尺ばかり余りたらむと見ゆ。

(末摘花 292—293 頁)

この描写から、末摘花の容貌の特徴がわかる。「居丈の高く」と背が高く、「を背長に見えたまふ」と背中が曲がりに見える。(新編日本古典全集では「を背長に見えたまふ」について、「『背のたわみまがれるをいふなるべし』(玉の小櫛)」と頭注がつけられている。本論はそれにより、「背まがりに見える」と解釈する。)[普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂りて色づきたる」と鼻が普賢菩薩の乗物のように高く長く伸びている。そのような鼻を見て、光源氏は思わず目が止まる。「色は雪はづかしく白うて、さ青に」と顔色は雪のように白く、青みが付いている。「額つきこよなうはれたる」と額は広く腫れており、「下がちなる面やうは、おほかたおどろおどろしう長きなるべし」と顔の下半分が長いという。「痩せたまへること、いとほしげにさらほひて、肩のほどなど、痛げなるまで衣の上まで見ゆ」と非常に痩せており、骨ばっている。その描写に続き、「何に残りなう見あらはしつらむと思ふものから、めづらしきさまのしたれば、さすがにうち見やられたまふ」(293 頁)と源氏の心中が語られる。源氏はなぜ見てしまったのだらうと後悔しながら、あまりにもめづらしいからついつい目

がそちらに止まったのである。源氏の反応から末摘花の容貌はかなり異様であることがわかる。

しかし、その異様な容貌に唯一の美点が描かれている。「頭つき、髪のかかりはしも」と頭つきと髪のかかり具合だけは格好よく、「うつくしげにめでたしと思ひきこゆる人々にもをさをさ劣るまじう、褂の裾にたまりて引かれたるほど、一尺ばかり余りたらむと見ゆ」と髪は美しくすばらしいと思われるほかの女性に劣らず、非常に長く豊かである。

容貌描写に続き、末摘花の衣装の描写がある。

着たまへる物どもをさへ言ひたつるも、もの言ひさがなきやうなれど、昔物語にも人の御装束をこそまづ言ひためれ。聴色のわりなう上白みたる一かさね、なごりなう黒き褂かさねて、表着には黒貂の皮衣、いときよらにかうばしきを着たまへり。古代のゆゑづきたる御装束なれど、なほ若やかなる女の御よそひには似げなうおどろおどろしきこと、いともてはやされたり。

(末摘花 293—294 頁)

この描写から末摘花の装束の異様さがわかる。色褪せた衣に流行遅れの皮衣を着用している。古風な衣装で、若い女性には不似合いである。そのように、末摘花は外貌だけでなく、衣装まで異様であり、源氏を驚かせた。源氏はかわいそうと思いながら、急いで邸を出た。その時、末摘花の貧しい門番を見て同情しながら、以下の叙述のように末摘花の鼻を思い出した。

「ふりにける頭の雪を見る人もおとら

ずぬらす朝の袖かな

幼き者は形蔽れず」とうち誦じたまひても、鼻の色に出でていと寒しと見えつる御面影ふと思ひ出でられて、ほほ笑まれたまふ。

(末摘花 296 頁)

その時の源氏は、以下のような心理である。

世の常なるほどの、ことなることなきならば、思ひ棄ててもやみぬべきを、さだかに見たまひて後はなかなかあはれにいみじくて、まめやかなるさまに常におとづれたまふ。

(末摘花 297 頁)

すなわち、世間並みの女性であれば、自分が捨ててもほかに世話を見る人がいるだろうが、末摘花が世間並みの女性ではないため、自分が生活援助しないと見守る男がいないと源氏は思っている。そういう気持ちで末摘花の生活を援助し続ける。

また、末摘花の風貌はいかに異様であるか、末摘花巻のほかの女性に関する描写と比較すれば、更に明らかになる。

巻末では、源氏が末摘花の邸から二条院へ戻り、紫の上と親密に遊んでいる。その場面で、紫の上の容姿描写が見られる。

二条院におはしたれば、紫の君、いともうつくしき片生ひにて、紅はかうなつかしきもありけりと見ゆるに、無文の桜の細長なよよかに着なして、何心もなくてものだたまふさまいみじうらうたし。古代の祖母君の御なごりにて、齒ぐろめもまだしかりけるを、ひきつくろはせたまへれば、眉のけぎやかになりたるもうつくしうきよらなり。

(末摘花 305 頁)

紫の上の可愛らしく幼い姿は非常に詳しく描かれており、末摘花の容貌と対照的である。「紅はかうなつかしきもありけり」と同じ紅色でも末摘花より紫の上のほうが可愛らしい。紫の上と絵を描いた時、末摘花の容姿が頭に浮かんでいる。

髪いと長き女を描きたまひて、鼻に紅をつけて見たまふに、絵に描きても見まうきさましたり。

(末摘花 305—306 頁)

髪が長く、鼻に紅がついている末摘花の姿を描いたのである。絵に描いたものでも見たくないと感じる。紫の上の容貌との比較によって、末摘花の異様さが更に際立っている。

1.2 『源氏物語』以前の醜貌描写

末摘花の容貌はいかに特殊性があるかを分析するため、『源氏物語』以前の醜貌描写をたどる必要があると考えられる。この節では『源氏物語』以前の日本文学における醜貌描写をまとめることによって、末摘花の容貌の特殊性を論じる。

まず、『日本書紀』において泉津醜女についての描写がある。

乃ち泉津醜女八人を遣し、追ひて留めまつる。故、伊弉諾尊、劍を抜き背に揮きつつ逃げたまふ。因りて黒鬘を投げたまふ。此即ち蒲陶に化成る。醜女見て採噉む。

み了ふれば更追ふ。伊弉諾尊、また湯津爪櫛を投げたまふ。此れ即ち筍に化成る。醜女亦以ちて抜き噉む。⁸

(卷一 45 頁)

泉津醜女が具体的にどのような容貌をしているかは述べられていない。『古事記』においては石長比売の記述が見られる⁹。

其の姉石長比売を副へ、百取の机代の物を持たしめて、奉り出だしき。故爾くして、其の姉は、甚凶醜きに因りて、見畏みて返し送り、唯に其の弟木花之佐久夜毘売のみを留めて、一宿、婚を為き。

(上巻 121 頁)

大山津見神は娘の姉妹を邇々芸能命に捧げたが、邇々芸能命は美しい妹の木花之佐久夜毘売をとどめ、醜い姉の石長比売を返した。石長比売の容貌について、「甚凶醜き」という。また、同じく『古事記』に述べられる歌凝比売命と円野比売命の叙述がある。

又、其の後の白しし随に、美知能宇斯王の女等、比婆須比売命、次に、弟比売命、次に、歌凝比売命、次に、円野比売命、并せて四柱を喚し上げき。然れども、比婆須比売命・弟比売命の二柱を留めて、其の弟王の二柱は、甚凶醜きに因りて、本主に返し送りき。是に、円野比売の慚ぢて言はく、「同じ兄弟の中に、姿醜きを以て還さえし事…

(中巻 210—211 頁)

垂仁天皇は美知能宇斯王の女等、比婆須比売命、弟比売命、歌凝比売命、円野比売命の四人を召されたが、比婆須比売命と弟比売命をとどめ、歌凝比売命と円野比売命が非常に醜いため、本王に返された。容貌について、「甚凶醜き」「姿醜き」と書かれ、具体的にどの部分が醜いか描かれていな

い。以上の「醜女」に関する記述をまとめると、単なる容貌の醜さと書かれ、具体的にどのような容貌をしているか詳述していないことがわかる。

そして、作り物語である『落窪物語』に至ると、醜貌が細かく描かれる傾向がある。

…とうちむつかりて行く後手、子多く生みたるに落ちて、わづかに十すぢばかりにて、居丈なり。〈うちふくれて、いとをこがまし〉と、少将つくづくとかいばみ臥したり。¹⁰

(巻一 84 頁)

継母の北の方について、髪が短く、体つきが肥えているという醜貌描写が見られる。更に、「面白の駒」についての醜貌描写が非常に多くある。具体的に見ると、次のようである。

さすがに笑みたる顔、色は雪の白さにて、首いと長うて、顔つきただ駒のやうに、鼻のいららぎたること限りなし。

(巻二 151 頁)

「…兵部の少輔、かたちいとよく、鼻いとをかしげなるを婿どりたまへる」とのたまへば、女君、「ことに人のとりわきて誉めぬ所よ」とのたまへば…

(巻二 155 頁)

灯のいと明きに見れば、首よりはじめて、いと細く小さくて、面は白き物つけ化粧したるやうにて白う、鼻をいららがし、さし仰ぎてゐたるを、人々あさましうてまもるに(中略)顔の見苦しう、鼻の穴よりは人通りぬべく、吹きいららげて臥したるに…

(巻二 160—163 頁)

少納言、「嘲弄し聞こえさせたまへる

なり。御鼻なむ、中にすぐれて見苦しうおはする。鼻うち仰ぎいらぎて、穴の大きなことは、左右に対建て、寢殿も造りつべく」など言へば…

(巻二 183頁)

色が雪のように白く、首と顔つきが長く、鼻が仰向きで、鼻の穴が大きいという「面白駒」の醜貌が描写される。色が白く、顔つきが長く、鼻が醜いという三点は末摘花と共通する。また「顔つきただ駒のやうに」と「普賢菩薩の乗物とおほゆ」は、両方とも動物に喩えたという点で通じる。湯原美陽子氏が『王朝物語文学における容姿美の研究』(有精堂 1998年8月)においても指摘したように、『落窪物語』からは、以前の文学作品と異なり、醜貌に関する描写が細くなる傾向がある。

しかし、『落窪物語』の醜貌描写は、鼻を中心にした描写が多い。「ことに人のとりわきて誉めぬ所よ」という言葉から見ると、鼻は美貌の特徴としてあまり描かれない部位であることがわかる。

それに対して、末摘花の容貌描写に見える「色は雪はづかしく白うて」、また鼻についての詳しい描写「普賢菩薩の乗物とおほゆ。あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂りて色づきたること、ことのほかにうたてあり」は『落窪物語』の醜貌描写を踏襲している。そのほか、身長「居丈の高く、を背長に見えたまふ」、または体型「痩せたまへること、いとほしげにさらほひて」から、額つき「額つきこよなうはれたる」、顔つき「下がちなる面やうは、おほかたおどろおどろしう長きなるべし」まで極めて詳しく描かれている。更に、末摘花の不似

合いの衣装も「聴色のわりなう上白みたる一かさね、なごりなう黒き褂かさねて、表着には黒貂の皮衣」と詳述されている。また、末摘花の容貌を描写しながら、「さればよと、胸つぶれぬ」「ふと目ぞとまる」「何に残りなう見あらはしつらむと思ふものから、めづらしきさまのしたれば、さすがにうち見やられたまふ」(末摘花 293頁)「何ごととも言はれたまはず」(末摘花 294頁)とそれを見ている光源氏の反応と評価を詳しく描写したのである。なぜしっかり見てしまったのだろうと後悔しながら、あまりに珍しいから堪らず目が止まるという相反する気持ちが生き生きと描写されるようになった。

以上のように、『源氏物語』は『落窪物語』の醜貌描写を踏襲しながら、更に詳しく描いたという点で、『落窪物語』より一歩進んでいると言えるだろう。そして、末摘花の髪が極めて美しいという点も見逃せない。

『落窪物語』以前の日本文学には醜女に関する記述はしばしば見られるが、具体的にどの部分が醜いかは詳しい描写が少ない。そして、『落窪物語』には、人物の醜い容貌について細かく描かれてきた。さらに、『源氏物語』になると、醜貌描写が更に豊かになる一方、同じ人物の醜貌だけではなく、美点も描かれている。

以上まとめたように、末摘花巻における末摘花の造型は『源氏物語』においてだけでなく、『源氏物語』以前の日本文学の人物造型と比較しても、非常に特別な風貌である。末摘花の醜貌はどこからヒントを得たのであろう。その問題について、さまざま

まな先行研究で考察されている。次の節では、末摘花の容貌描写と中国古典文学における醜貌の描写とを比較し、両者の共通性を論じていく。

1.3 中国古典における醜女の描写

中国古典文学の中に女性をめぐる描いた作品が数多くあり、女性についての容姿描写も非常に豊かである。『源氏物語』以前、すなわち唐代までの醜貌に関する描写を分析する。

『列女伝』は女性の列伝であり、前漢の劉向によって撰せられ、様々な女性像を描いたのである。その中で、女性の醜貌描写も少なくない。まずは鍾離春の描写である。

鍾離春者、齊無鹽邑之女、宣王之正后也。其爲人極醜無雙、白頭・深目、長壯・大節、叩鼻結喉、肥項少髮、折腰出胸、皮膚如漆。(鍾離春なる者は、齊の無鹽邑の女、宣王の正后なり。其の人と為りは極めて醜きこと雙び無く、白頭・深目、長壯・大節、叩鼻・結喉、肥項・少髮、折腰・出胸、皮膚は漆の若し)¹¹

(巻六 辯通傳 701 頁)

「凹んだ頭に深くくぼんだ目、のっぴでいかつい身体つき、上をむいた蓮切鼻につき出た喉ぶえ、太い首で髪は少なく、曲がった腰、突き出た胸、漆のような皮膚」という醜貌の描写である。「長壯・大節」「折腰」は末摘花の「居丈の高く、を背長に見えたまふ」と類似する。「叩鼻」と末摘花の「普賢菩薩の乗物」みたいな鼻は、両方とも鼻を醜く描いている。

また、同じく『列女伝』に宿瘤女の醜貌

描写がある。

宿瘤女者、齊東郭採桑之女、閔王之后也。項有大瘤、故號曰宿瘤。

(宿瘤女なる者は、齊の東郭の桑を採むの女にして、閔王の後なり。項に大瘤有れば、故に號して宿瘤と曰ふ。)

(巻六 辯通傳 715 頁)

首に大瘤があるという身体の欠陥があるから、「醜女」とされる。それ以外の容貌がふれていない。

そして『後漢書』逸民伝に孟光という女性の話が描かれている。孟光は梁鴻の妻であり、その容貌については以下のように描かれている。

体は肥えており、顔は醜く、おまけに色が黒い。力は石臼でも持ち上げる。¹²

(291 頁)

肥えた体型、黒い肌、強い力は醜とされる。「体が肥えている」という描写は『落窪物語』における北の方の描写「うちふくれて、いとをこがまし」と類似する。唐代には少し太っている女性が美人とされるが、それ以外の時代には、痩せていて弱々しい女性の方が好まれる。『源氏物語』には病気で痩せているもしくは面痩せしている女性が美しく描写されている。「いとにほひやかにうつくしげなる人の、いたう面痩せて、いとあはれとものを思ひしみながら」(桐壺 22 頁)と桐壺更衣の描写から、美しい人が痩せてしまっても、なお美しくみえることがわかる。「痩せたまへること、いとほしげにさらほひて、肩のほどなど、痛げなるまで衣の上まで見ゆ」と末摘花の痩せている体型は逆に異様とされる。それは末摘花がいたわしいほど痩せすぎて、し

かも骨格が大きく、骨ばっていて、肩の辺は衣からでも痛々しく感じるからである。そのような痩せすぎる体つきはかえって異様と思われた。

そして、『文選』の「登徒子好色賦」という文章には醜貌と美貌が細かく描かれている。

東家之子、増之一分則太長、減之一分則太短。著粉則太白、施朱則太赤。眉如翠羽、肌如白雪。腰如束素、齒如含貝。嫣然一笑、惑陽城、迷下蔡。然此女登牆窺臣三年、至今未許也。登徒子則不然。其妻蓬頭攣耳、齟脣歷齒。旁行踽儻、又疥又痔。

(東家の子、之に増すこと一分なれば則ちただ長く、之に減ずること一分なれば則ちただ短く。粉を著くれば則ちただ白く、朱を施せば則ちただ赤し。眉は翠羽の如く、肌は白雪の如し。腰は素を束ねたるが如く、齒は貝を含めるが如し。嫣然として一笑すれば、陽城を惑はし、下蔡を迷はす。然れども此の女牆に登りて臣を窺ふこと三年なるも、今に至るまで許さざるなり。登徒子は則ち然らず。其の妻は蓬頭攣耳、齟脣歷齒なり。旁行踽儻にして、又疥にして且つ痔なり。) ¹³

この描写では美貌と醜貌の対比描写が見られる。「一分でも背を伸ばせば高すぎ、一分でも減らせば低すぎ、白粉を付ければ白くなりすぎ、紅を塗れば赤くなりすぎ」というちょうどいい身長と顔色、また白い肌と細い腰が美の表現である。それに対して、「髪が乱れ、耳はつぶれ、唇は薄く、齒は欠け、足はふらつき、背は曲がって

て、疥癬の上に痔である」という醜の表現が書かれている。「背が曲がっている」という表現と末摘花の「を背長に見えたまふ」と類似する。

唐代の敦煌変文である「破魔変文」にも醜貌描写がある。

眼は灯心皿のごとく、顔は火曹に似て、額は広く頭は尖り、胸は高く鼻は曲がり、髪は黄色く齒は黒く、眉は白く口は青く、顔は皺によって、まるで皮の張りついた髑髏のよう、首は長くて申にさした団子のようです。全身の錦繡は二幅の麻のスカートに変わり、頭の上の梳釵是一群の蛇と変わりました。身はかがまり首は縮まり、寒さに凍てた鳥同然。腰は曲がり脚は長く、秋を過ぎた鴉の鳥のよう。¹⁴

「額は広く頭は尖り、鼻は曲がり」という表現は末摘花の「額つきこよなうはれたる」「高うのびらかに、先の方すこし垂りて」の表現と類似点がある。そして、「首が長い」という特徴は「面白の駒」の長い首と一致する。

同じく唐代の敦煌変文である「醜女縁起」には極めて詳しい醜貌描写がある。

娘の醜さ 世にも稀
上から下までなめし革も同然
両足はがに股 皮膚はざらつき 外り返る
髪はちよろちよろ 驢馬のしっぽ
人見るときは身ごと右に左に向き直り
歩む姿は礼儀も作法もあらばこそ
十指はほっそりと露柱のごとく
両の眼は木のふし穴
大王には何度もうち眺めつつ、嘆くこ

としきり。「なんの罪の報いで、こうも醜い身に！」

王女にはたおやかさまるでなし

この変事 なみなみならず

上の唇は重さ半斤あまり

鼻の穴は太さは竹筒以上

生まれ来たりて未だかつて顔ほころばず

聞けば笑うは三年に一度のみと

歩む姿の風流もがなと思えば¹⁵

「鼻の穴は太さは竹筒以上」は末摘花の容貌描写と同じく、鼻を醜く描いたのである。鼻の穴が大きいという点は「面白の駒」の鼻とも一致する。

また、唐代の詩人白楽天の弟である白行簡が書いた文章「大楽賦」に醜貌描写が見られる。

更有悪者、醜黒矧肥、醫高面欹、或口大而齟齬、或鼻曲而累垂、髻不梳而散亂、衣不斂而離披。

(さらにこんな醜い女がいる。色黒で、ずんぐり、臀は高く、顔がゆがんでいる。あるいは口は大きく釜にのせるこしきのようである。あるいは鼻は曲がって垂れ下り、髪は梳かずに入り乱れ、衣服は整えず肌けている。)¹⁶

「鼻は曲がって垂れ下り」の表現と末摘花の「高うのびらかに、先の方すこし垂りて」という鼻の描写と類似している。

まとめると、「長壯・大節」、「折腰」、「背が曲がっている」、「額は広く頭は尖り、鼻は曲がり」、「鼻は曲がって垂れ下り」などの描写は末摘花の容貌描写と類似する。「居丈の高く、を背長に見えたまふ」、「高うのびらかに、先の方すこし垂りて」、「普賢菩

薩の乗物」みたいな鼻という末摘花についての醜貌描写は中国文学からの影響があると考えられる。

その一方、日本文学として『源氏物語』の容貌描写は独創性がある。「齒が黒い」「背が低い」などは中国古典には醜の描写とされるが、平安時代には黒く染めた齒と小柄な体型が好まれる。これらの醜貌描写から両国の審美観が少し異なることも窺える。中国文学には肥えた体型が「醜的」描写とされるが、『源氏物語』には末摘花の痩せている体型が「醜的」描写とされる。また、もう一つ重要な相違点がある。「少髪」、「髪が乱れ」、「髪は黄色い」、「髪はちよろちよろ」、「髪は梳かずに入り乱れ」は、いずれも髪が醜く描かれている。末摘花の髪は醜貌と対照的に、美しく描かれていることは特殊性がある。

1.4 蓬生巻以降における末摘花の容貌描写

末摘花巻では、極めて詳しく、露骨に末摘花の容貌が描かれていたが、蓬生巻では末摘花の醜貌はあまりふれられておらず、唯一強調されたのは末摘花の赤い鼻である。

音泣きがちに、いとど思し沈みたるは、ただ山人の赤き木の実ひとつを顔に放たぬと見えたまふ御側目などは、おぼろけの人の見たてまつりゆるすべくにもあらずかし。くはしくは聞こえじ、いとほしうもの言ひさがなきやうなり。

(蓬生 336 頁)

源氏の生活援助で生きる末摘花は、源氏の流離で生活がきびしくなる。その時、太宰大弐の妻である叔母が末摘花への報復を

思い、西国への同行を巧妙に勧誘したが、末摘花は乗らなかった。末摘花は貧しさの中、辛抱強く忍び耐える。辛い生活の中泣く日が多く、その悲しい姿は「ただ山人の赤き木の実ひとつを顔に放たぬ」と山人の赤い木の実を顔に置いたように見える。ここは末摘花の赤い鼻の描写である。「御側目などは、おぼろけの人の見たてまつりゆるすべきにもあらずかし」とその横顔などはほとんどの人が見て我慢できないほどである。ところが、横顔などは具体的にどのような様子をしているか、「くはしくは聞こえじ」と作者は詳しく語らない。

そして、初音巻では、年頭源氏は六条院と二条の東院の女性を巡訪した。末摘花のもとへ訪れ、その時源氏が見た末摘花の姿はこのように描かれる。

いにしへ盛りと見えし御若髪も、年ごろに衰へゆき、まして滝の淀み恥づかしげなる御かたはら目などをいとほしと思せば、まほにも向かひたまはず。柳はげにこそすさまじかりけれと見ゆるも、着なしたまへる人からなるべし。光もなく黒き搔練のさみさみしく張りたる一襲、さる織物の褂を着たまへる、いと寒げに心苦し。襲の褂などは、いかにしなしたるにかあらん。御鼻の色ばかり、霞にも紛るまじくはなやかなるに、御心にもあらずうち嘆かれたまひて、ことさらに御几帳ひきつくりひ隔てたまふ。

(初音 153—154 頁)

末摘花の衰えた髪、「いと寒げに心苦し」と感じられる衣装、派手な鼻の色が描写されたが、末摘花巻のような詳しく露骨な容

貌描写は見られない。

2. 「醜女」における美的描写

末摘花巻では末摘花の異貌描写と対照的に、髪が極めて長く美しく描かれるのも注意すべき点である。当時の女性の美判断(美人か否か)の基準の一つが髪である。末摘花の美しい髪は後の物語ではどのように描かれたのか、また彼女の髪は物語の展開にどのような役割を担っているのであろう。本章は物語史上の髪における描写をたどりながら、末摘花物語の展開を踏まえ、末摘花の髪の意味について検討する。

2.1 末摘花巻における末摘花の髪

末摘花の髪についての描写は源氏がはじめて末摘花の正体を見た時に始まる。末摘花の異様な風貌に関する描写に続き、末摘花の美しい髪をかなり詳しく描いている。

頭つき、髪のかかりはしも、うつくしげにめでたしと思ひきこゆる人々にもをさをさ劣るまじう、褂の裾にたまりて引かれたるほど、一尺ばかり余りたらむと見ゆ。

(末摘花 292—293 頁)

頭の全体的な形がよく、髪のかかり具合が美しく、髪の手が装束の裾に垂れかかるほど非常に長く、裾よりも一尺長いと描かれている。しかも、「うつくしげにめでたしと思ひきこゆる人々にもをさをさ劣るまじう」と美しいと思われるほかの女性の髪に劣らない程度であると評価される。その後、源氏が二条院へ戻り、紫の上と絵を書いている時、また末摘花を思い出した。

髪いと長き女を描きたまひて、鼻に紅をつけて見たまふに、絵に描きても見まうきさましたり。

(末摘花 305-306 頁)

源氏はついさっき会った末摘花の姿を思い出し、思わず末摘花の姿を絵に描いた。「髪いと長き女」を描いたのは末摘花の美しく長い髪が源氏にとってかなり印象深いからであろう。

末摘花の髪がいかに美しいかを探究するために、ほかの女性との比較が不可欠になると考えられる。まずは紫の上の髪である。紫の上が若い時期の描写があり、

…いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

(若紫 206 頁)

と髪は「ゆらゆら」と描写している。また、成人した紫の上の髪描写には、次の文にある「いみじうめでたき」という言葉が使われている。

いとうつくしげにねびととのほりて、御もの思ひのほどに、ところせかりし御髪のすこしへがれたるしもいみじうめでたきを、いまはかくて見るべきぞかしと御心落ちるるにつけては、またかの飽かず別れし人の思へりしさま心苦しう思しやらる。

(明石 272 頁)

また女三宮の髪描写は次のようである。

御髪の裾までけぎやかに見ゆるは、糸をよりかけたるやうになびきて、裾のふさやかにそがれたる、いとうつくしげにて、七八寸ばかりぞあまりたまへ

る。御衣の裾がちに、いと細くささやかにて、姿つき、髪のかかりたまへるそばめ、いひ知らずあてにらうたげなり。

(若菜上 141 頁)

髪の裾はふさふさとし、「うつくしげに」という言葉が使われている。そして、髪の長さは身長より七、八寸あまる。このように比較すると、袿の裾より一尺も長い末摘花の髪のほうが随分長いと言える。また源氏による軒端萩の垣間見があり、その場面において髪描写がある。

髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、下り端、肩のほどきよげに、すべていとねぢけたるところなく、をかしげなる人と見えたり。

(空蟬 120 頁)

軒端萩の髪はふさふさしており、長くはないが、下り端と肩のあたりがすっきりしたため、「をかしげ」と思われる。

以上見てきたように、ほかの女性の髪と比較すると、「人々にもをさをさ劣るまじう」「うつくしげにめでたし」と思われる末摘花の髪はほかの女性に劣らない美しさを持っている。以上見て来たように、末摘花は単なる「醜女」ではないことがわかる。

2.2 『源氏物語』における髪の描写

末摘花の髪の意味を検討するために、物語史上における髪の描写及び髪の役割を分析する必要があると思われる。物語史上において髪の描写方法はどのように発展してくるか、また各作品はどのような特徴があるかを論じたい。本節では『源氏物語』以前の髪描写と『源氏物語』における髪描写

を分析する。

まず、『竹取物語』における髪に関する描写は、以下の三例だけである。

三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば、髪あげなどとかくして髪あげさせ、裳着す。¹⁷

(18 頁)

さが髪をとりて、かなぐり落とさむ。

(69 頁)

御ぐしもたげて、御手を広げたまへるに…

(54 頁)

この三例を見ると、一つ目の用例だけが女主人公の描写である。しかも、「髪あげ」という表現は女主人公の成人の儀式であり、女主人公の美を表すためではない。『竹取物語』における髪の描写の特徴をまとめると、用例が少なく、女性の美を表す表現として使われていない。以後の『うつほ物語』と『落窪物語』の用例を見ると、次のような髪描写がある。

あて宮、その頃、御かたちの盛りなり。丈五尺に今少し足らぬほど、いみじく姿をかしげに、御髪のうるはしくおかしげに、清らなる黒紫の絹を瑩せると、生ひたる限り、末まで至らぬ筋なし。¹⁸

(『うつほ物語』あて宮 121 頁)

御髪いとめでたし。頭つき、御有様、いとうつくしげにておはす。母君、いともものしく、愛敬づきて、髪うるはしく清げなり。(中略) 御髪をかき出でて見たまへば、いと多くて七尺ばかりあり。

(『うつほ物語』国譲 中 145 頁)

御髪は瑩しかけたるごととして、隙なく揺りかかりて、玉光るやうに見えたまふ。

(『うつほ物語』蔵開 上 334 頁)
落窪をさしのぞいて見たまへば、なりのいとあしくて、さすがに髪はいとうつくしげにてかかりてゐたるを、〈あはれ〉とや見たまひけむ、身なりいとあし。

(『落窪物語』巻一 25-26 頁)
髪はこのごろしもつくるひければ、いとうつくしげにて、たけに五寸ばかり余りて、ゆらめき行く後手、いといみじくをかしげなり。

(『落窪物語』巻一 102 頁)

「七尺ばかりあり」「たけに五寸ばかり余り」と髪の長さ、「清らなる黒紫の絹を瑩せると」「瑩しかけたる」「玉光るやう」と髪の色、彩、「いと多く」と髪の量、「隙なく揺るかかりて」「ゆらめき行く後手」と髪の形態を極めて細かく描いた。また「うつくしげに」「いみじくをかしげ」「うるはしく清げなり」という美の表現が使われている。『うつほ物語』と『落窪物語』には、髪の描写は『竹取物語』より豊かになったほか、女性を美しく描写する表現として用いられている。すなわち、美しく長い髪は美人である特質の一つとして描かれている。

そして、『源氏物語』に至ると、髪の描写はさらに豊富になるほか、髪の機能も異なる。湯原美陽子氏の統計によると、『うつほ物語』において、美的対象語としての髪類の語彙数は8であり、用例数は63例である。それに対して、『源氏物語』にお

ける美的対象語としての髪の話数数は19であり、用例数は170例である¹⁹。髪に関する描写は豊かになっただけでなく、髪の意味も深くなった。吉井美弥子氏は『源氏物語』における髪について、「聖なるヒロインたる女君たちの美しさの描写ではなく、身体の一部でありながら、身体の中でもきわめて特異な髪というものの意義をあらためて問うかのように、重い意味を潜めつつ物語の本質に深く関わっているのである」²⁰と論じた。

ここでは髪が美しい紫の上と女三宮を例として取り上げ、『源氏物語』における髪描写の概況を捉えたい。それぞれ重要な場面を取り上げ、検討する。

まず、紫の上の髪描写の場面を見る。紫の上の初登場の場面において、その髪が描かれている。

髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。(中略) つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざしいみじううつくし。(中略) 伏し目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪つやつやとめでたう見ゆ。

(若紫 206—208頁)

源氏がはじめて若紫を見た北山の垣間見の場面である。目に映したゆらゆらとしている童女の髪は源氏にとって印象深い。若紫の美しさと幼さは髪描写からも感じられる。そして、成長した紫の上の髪は更に美しくなる。

いとうつくしげにねびととのほりて、御もの思ひのほどに、ところせかりし

御髪のすこしへがれたるしもいみじうめでたきを、いまはかくて見るべきぞかしと御心落ちゐるにつけては、またかの飽かず別れし人の思へりしさま心苦しう思しやらる。

(明石 272頁)

源氏が明石から帰京した時見た大人らしくなった紫の上の姿である。源氏と離れている間に心を労されたので紫の上の髪は少し薄くなったが、かえて魅力的に見える。そして、紫の上が亡くなった場面にも、髪描写がある。

…まことに言ふかひなくなりてはさせたまひて後の御髪ばかりをやつさせたまひても、ことなるかの世の御光ともならせたまはざらんものから、目の前の悲しびのみまさるやうにて、いかかはべるべからむ」(中略) 御髪のただうちやられたまへるほど、こちたくけうらにて、つゆばかり乱れたるけしきもなう、つやつやとうつくしげなるさまぞ限りなき。

(御法 508—509頁)

髪を削ぐか削がないかの葛藤と紫の上の死後になってもふさふさする乱れない髪姿が描かれている。以上見てきたように紫の上の髪は生涯にわたって、物語の展開に伴い、異なる視点から捉えられることがわかる。

女三宮の髪描写は柏木の「垣間見」の場面から始まる。その時の髪描写は次のようになる。

御髪の裾までげざやかに見ゆるは、糸をよりかけたるやうになびきて、裾のふさやかにそがれたる、いとうつくし

げにて、七八寸ばかりぞあまりたまへる。御衣の裾がちに、いと細くささやかにて、姿つき、髪のかかりたまへるそばめ、いひ知らずあてにらうたげなり。

(若菜上 141 頁)

平安時代において身分が高い女性は姿を簡単に見せることはないので、男性は隙をついてめあての女性を「垣間見」し、情報を得る。「垣間見」できると、それが恋愛の契機となることが多い。女三宮の不注意が柏木の「垣間見」につながっている。この場面において、髪の全体的なかたち、長さが細かく描かれている。この部分において女三宮の描写は柏木を目を通して描かれている。この時女三宮の髪が彼女の身体を代表し、柏木にとって性的な魅力の象徴として映る。このことは後の柏木との密通を暗示しているのではないか。

それ以後は、源氏と対面する時の髪描写がほとんどである。「桜の細長に、御髪は左右よりこぼれかかりて、柳の糸のさまじたり」(若菜下 191 頁)と「いとあたらしう、あはれに、かばかり遠き御髪の生ひ先を、しかやつさむことも心苦しければ」(柏木 302 頁)などの描写がある。「かばかり遠き御髪の生ひ先」と豊かで長い髪が描かれている。また、女三宮の髪は彼女の出家と関わる場面で描写される。

御髪おろさせたまふ。いと盛りにきよらなる御髪をそぎ棄てて、忌むこと受けたまふ作法悲しう口惜しければ、大殿はえ忍びあへたまはず、いみじう泣いたまふ。

(柏木 308 頁)

宮も起きみたまひて、御髪の末のところせう広ごりたるを、いと苦しと思して、額など撫でつけておはするに、几帳を引きやりてみたまへば、いと恥づかしうて背きたまへる、いとど小さう細りたまひて、御髪は惜しみきこえて長うそぎたりければ、背後はことにけぢめも見えたまはぬほどなり。

(柏木 321 頁)

髪をそぎ棄てることは源氏との男女関係を切り捨てることも象徴している。

以上紫の上と女三宮の髪描写をまとめると、『源氏物語』における髪はただ女性の美を描写するためだけでなく、物語の場面展開または女性の男性との関係と深く関わっており、場面によって違う視点から捉えられている。『源氏物語』における髪描写は、以前の物語と同様、女性の美を表すとともに、更に深い意味を持つ。それでは、末摘花の髪は物語においてどのような意味を持っているか。次の節で分析する。

2.3 末摘花の髪の意味

『源氏物語』における髪は、それ以前の物語と同様、女性の美を表す。それと同時に、物語の展開に伴い髪描写が異なる。本節は末摘花の髪各巻における描写の分析から末摘花の髪の意味を検討する。

末摘花の髪描写は末摘花巻に始まる。源氏が末摘花の異様な風貌を見て驚いた後、末摘花の長く美しい髪が描かれている。

頭つき、髪のかかりはしも、うつくしげにめでたしと思ひきこゆる人々にもをさをさ劣るまじう、褂の裾にたまりて引かれたるほど、一尺ばかり余りた

らむと見ゆ。

(末摘花 293 頁)

2.1 で述べたように、この描写やほかの女性との比較から、末摘花は『源氏物語』におけるほかの女性にも劣らないような美しい髪を持っていることがわかる。

吉井美弥子氏は末摘花の髪について、以下のように述べている。

その醜貌からすれば、意外なほどに美しく豊かな髪のがさが語られていることも見逃せない。これは、末摘花の血の高貴さの証とも捉えられようが、これまでも民俗学的アプローチによってさまざまに説かれてきた末摘花の古代的靈性に通ずる、強い靈力の証とも捉えられるのではあるまいか。その意味では、末摘花の髪は、彼女と光源氏の媒体たりえているということになる。

確かに長い髪が末摘花の「高貴さの証」であると思われる。古代では貴族社会の女性があまり外出や労働をしない。身長よりも長い髪は女性の行動をかなり制限している印象を与える。つまり、長い髪はある程度身分の高さの象徴と言える。しかし、民俗学的アプローチから論述した「末摘花の古代的靈性」と「強い靈力の証」などは本文から見出せないのである。

「うつくしげにめでたしと思ひきこゆる人々にもをさをさ劣るまじう」と源氏は意識的にほかの女性と比較している。二条院へ帰り、紫の上と絵を描いた時、「髪いと長き女」の絵を描いたのは、末摘花の長い髪をかなり意識をしていたということである。美しく長い髪は末摘花の高貴さの象徴

であると同時に、源氏の心を捉え離さない魅力でもある。光源氏は末摘花の異様な風貌を見て驚いたが、末摘花の美しく豊かな髪に深く印象づけられたのではないか。

蓬生巻では、醜貌に関する描写は省筆されたが、末摘花の髪の描写は引き続き描かれている。筑紫へ向かい自分のもとを離れていく侍従に末摘花が髪を鬘にして贈る。その場面における描写は次のようになる。

形見に添へたまふべき身馴れ衣もしほなれたれば、年経ぬるしるし見せたまふべきものなくて、わが御髪の落ちたりけるを取り集めて鬘にしたまへるが、九尺余ばかりにていとよらなるを、をかしげなる箱に入れて、昔の薰衣香のいとかうばしき一壺してたまふ。

(蓬生 341 頁)

山本利達氏は末摘花のこの行為について、次のように述べている。

貧窮の極にあってもなお、末摘花は、侍従に自らの髪で作った鬘で、伝来の香を贈った。主人としてなすべき道を踏もうとしたのであろう。末摘花の古風な律義さのあらわれというべきであろう。その律義さの美しさが感じられる所であるが、このような律義さは、末摘花巻にも見られる。²¹

古くから別れの際に装束を贈る習慣がある。「形見に添へたまふべき身馴れ衣」を送るべきであったが、末摘花は「いとど音をのみたけきことにてものしたまふ」(蓬生 341 頁)と泣いてばかりで、衣が涙で濡れてしまい、贈れなくなる。そして、蓬生巻の末摘花は家がますます貧しくなり、

「女房」もどんどん離れていく。そのような状況における末摘花はほかに与えるべきものもないのである。そのため衣のかわりに、「九尺余ばかりにていとよらなる」と唯一人にほこれる綺麗な髪を拾い、鬘を作って贈ったのである。それは長年仕えてくれた侍従に対する末摘花の精一杯の気持ちである。この髪は末摘花の誠実さと一途な性格を表したのではないか。そして、鬘以外に常陸宮家伝来の薫衣香を贈ったのである。薫衣香は衣服にたきしめる香であり、絵巻で前齋宮が入内する時の朱雀院の贈り物でもある。「くさぐさの御薫物ども薫衣香またなきさまに、百歩の外を多く過ぎ匂ふまで」（絵巻 369 頁）と非常にいい香である。贈り物としての薫衣香も末摘花の古風で、高貴な気質を表しているのではあるまいか。

初音巻では、源氏は末摘花の身分を配慮し、「人目の飾りばかりはいとよくもてなしきこえたまふ」（初音 153 頁）と人目につく体裁だけは丁重に扱う。元旦の夕方、源氏は六条院の女性を訪問し、数日後二条の東院に末摘花と空蟬を訪れた。その時見た末摘花の姿は次のようになる。

いにしへ盛りと見えし御若髪も、年ごろに衰へゆき、まして滝の淀み恥づかしげなる御かたはら目などをいとほしと思せば、まほにも向かひたまはず。柳はげにこそすさまじかりけれと見ゆるも、着なしたまへる人からなるべし。光もなく黒き搔練のさるさるしく張りたる一襲、さる織物の褂を着たまへる、いと寒げに心苦し。襲の褂などは、いかにしなしたるにかあらん。御鼻の色

ばかり、霞にも紛るまじくはなやかなるに、御心にもあらずうち嘆かれたまひて、ことさらに御几帳ひきつくるひ隔てたまふ。

（初音 153 頁）

「いにしへ盛りと見えし御若髪」と末摘花巻に描かれた豊かで美しい髪が衰え、薄くなった上、滝の淀みよりも白い髪になったのである。「滝の淀み」について新編日本古典文学全集では「白髪形容。参考『落ちたぎつ滝のみなかみ年積り老いにけらしな黒き筋なし』（古今・雑上 忠岑）」と頭注がつけられる。そのような横顔が「いとほし」と思って、源氏は「いとほしと思せば、まほにも向かひたまはず」と顔を合せにならない。装束も不似合いで、源氏から贈られた桂の下に、黒い搔練を一襲着て、寒そうに見える。鼻の色ばかりは相変わらず派手である。源氏は思わず、「御心にもあらずうち嘆かれたまひて、ことさらに御几帳ひきつくるひ隔てたまふ」と末摘花の衰えた姿を見るのも忍びなく、わざわざ几帳を引き直して隔てを置いた。末摘花の年齢について言及されていないが、末摘花巻では源氏は 18 歳で、初音巻になると、源氏は 36 歳になる。18 年も経ったので、末摘花の衰えも自然だと思われる。末摘花巻では最大の美質とされた末摘花の髪は白くなったのは、どのような意味を持つだろう。初音巻では末摘花だけでなく、元旦源氏が花散里のもとへ訪れた場面にも、髪が衰えが描かれる。

御几帳隔てたれど、すこし押しやりたまへば、またさておはす。縹はげににほひ多からぬあはひにて、御髪なども

いたく盛り過ぎにけり。やさしき方にあらねど、葡萄鬘してぞつくろひたまふべき、我ならざらん人は見ざめしぬべき御ありさまを、かくて見るこそうれしく本意あれ、心軽き人の列にて、我に背きたまひなましかば…

(初音 147 頁)

源氏が几帳を押しやる行為は末摘花に対してわざわざ「御几帳ひきつくろひ隔てたまふ」という行為と対照的になる。また、「御髪などもいたく盛り過ぎにけり」と髪がひどく盛りを過ぎていたと描かれている。元々美人ではない花散里は年をとって更にみすばらしく見える。「我ならざらん人は見ざめしぬべき御ありさまを、かくて見るこそうれしく本意あれ」と源氏の心中がある。ほかの男であれば捨てるはずだが、花散里の世話をしているのがうれしいし、自分の寛容にも満足しているから続けようという源氏の心理である。

それと対照的に、源氏は末摘花を見るのも忍びない。しかし、末摘花はまったくそれに気づかず、「今はかくあはれに長き御心のほどを穩しきものに、うちとけ頼みきこえたまへる」(初音 154 頁)と源氏の変わらぬ心に安心し、心から源氏のことを頼りに思っている。その様子はとてもいじらしく書かれている。源氏は、次のように思っている。

かかる方にも、おしなべての人ならず、いとほしく悲しき人の御さまと思せば、あはれに、我だにこそはと御心とどめたまへるもありがたきぞかし。

(初音 154 頁)

これと類似した心理の描写は末摘花巻に

も「我はさりとも心長く見はててむ」(末摘花 287 頁)「我ならぬ人はまして見忍びてむや」(末摘花 295 頁)とあった。源氏は末摘花にほかに衣の世話をしている人か尋ね、「かく心やすき御住まひは、ただいとうちとけたるさまに、ふくみ萎えたるこそよけれ。うはべばかりつくろひたる御装ひはあいなくなむ」(初音 154 頁)とからかいの言葉を言った。それに対して、末摘花は鈍感だが、さすがに笑顔になり、兄の世話をしているので自分の着物が縫えず、皮衣でも兄に取られたと答えた。末摘花の素直であけすけなところが見られる。源氏は、彼女への世話が届かないところに気づき、弁明の言葉を次のように言った。

さるべきをりをりは、うち忘れたらむこともおどろかしたまへかし。もとよりおれおれしく、たゆき心の怠りに。まして方々の紛らはしき競ひにも、おのづからなん

(初音 155 頁)

源氏は二条院の倉を開けさせ、絹と綾などをあげ、末摘花の庭を眺めた。

荒れたる所もなけれど、住みたまはぬ所のけはひは静かにて、御前の木立ばかりぞいとおもしろく、紅梅の咲き出でたるにほひなど、見はやす人もなきを見わたしたまひて、
ふるさとの春の梢にたづね来て世のつねならぬはなを見るかな

(初音 155 頁)

このような独り言を言い、「はな」に末摘花の「鼻」をかける。二条の東院の風情は静かで落ち着いて、おもしろく見える。振り返って初音巻における源氏が二条東院

へ向かう場面の描写を見ると、「蓮の中の世界にまだ開けざらむ心地もかくや」（初音 152 頁）との一句がある。つまり、末摘花と花散里が住んでいる二条東院は源氏にとって六条院と離れており、また俗世とも離れている世界である。そこに住んでいる末摘花は、源氏にとって、「世のつねならぬ」とほかの女性と違うところがあり、世俗を離れている特別な存在である。

以上『源氏物語』における髪描写を分析したように、女性の髪は物語の展開に伴い、違う視点から捉えられている。末摘花の髪は末摘花巻では長く豊かで美しく描かれていたが、初音巻では白く衰えたように描かれている。容貌の唯一の美点である髪さえ衰えたが、源氏はやはりこの女性を見捨てるができない。それは末摘花が「世のつねならぬ」とほかの女性と違うところがあり、誠実さと質素さなどの美德を備えているからである。容貌によらず、「徳」によって源氏が末摘花を評価している。末摘花の「徳」について、次章で詳しく考察していきたい。

3. 「賢女伝」との人物造型比較

末摘花巻と蓬生巻における末摘花の容貌描写が異なっている。末摘花巻では細かく異様な風貌が描かれていたが、蓬生巻では省筆される。それでは、末摘花巻から蓬生巻までは性格などの末摘花の人物像はどのように変化するか。今までの変貌問題をめぐる先行研究をまとめた上で、中国古典文学における「賢女」の話と比較しながら、末摘花巻から蓬生巻まで末摘花の人物造型

の描き方の変容を論じる。

3.1 末摘花巻と蓬生巻間の人物造型の変容

末摘花巻において大輔命婦は常陸宮の姫君の噂話を持ち込んだ時、末摘花の性格について、「かいひそめ人疎うもてなしたまへば」（末摘花 267 頁）と述べている。末摘花はかなり控えめで、あまり人と交渉しないように描かれている。源氏は末摘花の琴を聞き、更に興味を引かれ、「昔物語にもあはれなることどももありけれなど」（末摘花 269 頁）と末摘花に対して期待している。その時、頭中将が登場し、末摘花をめぐって源氏と競い合う。二人とも末摘花へ文などを遣わしたが、末摘花はなかなか返事しない。そのため、源氏は痺れを切らし、「おぼつかなくもて離れたる気色なむいと心憂き」（末摘花 276 頁）と命婦に相談にする。命婦は「ひとへにものづつみし、ひき入りたる方はしも、ありがたうものしたまふ人になむ」（末摘花 276 頁）と源氏をなだめる。それを聞いた源氏は、「いと兎めかしうおほどかならむこそ、らうたくはあるべけれ」（末摘花 276 頁）とまた夕顔のことを思い出した。そのまま春・夏が過ぎ、秋になっても末摘花は相変わらず応答せず、「世づかず心やましよう」（末摘花 277 頁）と言い、命婦を促す。「世づかず」という言葉が使われ、『新編日本古典文学全集』では「世づくは、男女の情を理解する」と頭注がつけられる。命婦はまた「ただおほかたの御ものづつみのわりなきに」（末摘花 277 頁）となだめる。それに対して、源氏はこのように文句を言った。

それこそは世づかぬことなれ。もの思ひ知るまじきほど、ひとり身をえ心にまかせぬほどこそ、さやうにかかやかしきもことわりなれ、何ごととも思ひしづまりたまへらむと思ふにこそ。

(末摘花 277 頁)

その時、「女君の御ありさまも、世づかはしくよしめきなどもあらぬ」(末摘花 278 頁)という命婦の心理描写から、末摘花の「世づかぬ」様子が一層わかってくる。「女房」たちも返事を促しているが、末摘花本人は「あさましうものづつみしたまふ心にて、ひたぶるに見も入れたまはぬなりけり」(末摘花 279 頁)とまるで見向きもしないのである。

そして、源氏が再び末摘花のもとへ訪れたところ、命婦は物越しに源氏と対面するようにと勧めたが、末摘花は、恥ずかしがり、人と応対する方法がわからないと答えた。

いと恥づかしと思ひて、「人にももの聞こえむやうも知らぬを」とて奥さまへるざり入りたまふさま、いとうひうひしげなり。

(末摘花 280 頁)

命婦は「いと若々しうおはします」(末摘花 280 頁)と末摘花の子供っぽい性格を述べた。源氏が「いくそたび君がしじまに負けぬらんものな言ひそといはぬたのみに」(末摘花 283 頁)と嘆いた時、侍従がかわりに「鐘つきとちぢむことはさすがにてこたへまうきぞかつはあやなき」(末摘花 283 頁)と返歌した。そのような末摘花の行動に対して、次のような源氏の心中があった。

今はかかるぞあはれなるかし、まだ世馴れぬ人のうちかしづかれたると見ゆるしたまふものから、心得ずなまいとほしとおぼゆる御さまなり。

(末摘花 284 頁)

「まだ世馴れぬ人」である末摘花に対して、嘆いたのである。それ以後、訪れを怠る源氏に対して、命婦が末摘花の悲しい姿を伝えたが、源氏はこのように答えた。

もの思ひ知らぬやうなる心ざまを、懲らさむと思ふぞかし

(末摘花 288 頁)

何を話かけても答えてくれない末摘花に対して、「もの思ひ知らぬやうなる心ざまと」を、わざと焦らしたいと冗談を言った。源氏の歌に対して返歌できず、「ただ『むむ』とうち笑ひて、いと口重げなる」(末摘花 294 頁)としている。ついに完成した歌は、古めかしい歌であった。

からころも君が心のつらければたもとはかくぞそほちつつのみ

(末摘花 299 頁)

それに対して、源氏は、次のように末摘花の詠歌のレベルを批判したのである。

さても、あさましの口つきや、これこそは手づからの御事の限りなめれ、侍従こそとり直すべかめれ、また筆のしりとり博士ぞなかべきと、言ふかひなく思す。

(末摘花 299 頁)

以上のように、末摘花巻における末摘花については、「世づかぬ」「ものづつみ」「もの知らぬ」のような言葉が再三にわたり使われた。内気で、世間はなれで、男女の情がわからず、人並みの歌も作れないという

イメージが与えられる。

一方、蓬生巻では、末摘花巻における「世づかぬ」のイメージが異なって見えてくる。蓬生巻では、今まで面倒を見てくれた源氏の流離のため、末摘花の生活も打撃を受け、家がますます貧しくなり、邸も荒廃していく。「なかなかすこし世づきてならひにける年月に、いとたへがたく思ひ嘆くべし」（蓬生 327 頁）と源氏の到来で世間並の生活に馴れてきたが、今再び貧困に戻り、かえって耐え難くなる。結局「女房」たちは次々と離れて去ってしまう。居残った「女房」たちが調度を売却しようと勧めたが、末摘花は「見よと思ひたまひてこそしおかせたまひけめ。などてか軽々しき人の家の飾りとはなさむ。亡き人の御本意違はむがあはれなること」（蓬生巻 329 頁）と言い、父宮が残した邸を強い意志で守り生きている。その時、復讐の念を持つ叔母が度々西国への同行を勧誘したが、末摘花は、「風の伝てにても、我かくいみじきありさまを聞きつけたまはば、かならずとぶらひ出でたまひてん」（蓬生 336 頁）と源氏が必ず訪ねてくると信じ、ひたすら待ち続ける。その時、源氏は帰京し、「天の下のよろこび」（蓬生 334 頁）と人々が騒いでいた。源氏の訪れがなく悲しさに沈んでいる末摘花はまた叔母に誘われ、次のように断った。

「いとうれしきことなれど、世に似ぬさまにて、何かは。かうながらこそ朽ちも亡せめとなむ思ひはべる」とのみたまへば

（蓬生 340 頁）

「いとうれしきことなれど」と相手の気持を思いやると同時に、父宮の邸とともに

に朽ち果ていく決意を示した。末摘花の一寸な性格は蓬生巻では更に強く出た。

叔母は最後に侍従を連れていくことにした。長年仕えてくれた侍従までもが自分を捨てていくため、末摘花はいっそう悲しくなる。自分の髪で作った鬘と伝来の香を贈り、誠意をこめて自分の感情を表している。

「たゆまじき筋を頼みし玉かづら思ひのほかにかけ離れぬる

故ままののたまひおきしこともありしかば、かひなき身なりとも見はててむとこそ思ひつれ。うち棄てらるるもことわりなれど、誰に見ゆづりてかと恨めしうなむ」とていみじう泣いたまふ。

（蓬生 342 頁）

上のように歌を歌い、惜別の感情を詠じた。侍従に贈った鬘を「玉かづら」にたとえ、「たゆ」「筋」「かけ」を「玉かづら」の縁語にし、自分と侍従との関係は玉かづらのように永遠に続くことを詠む。それ以後、末摘花の生活は更に苦しくなる。

ここには、いとどながめまさるころにて、つくづくとおはしけるに、昼寝の夢に故宮の見えたまひければ、覚めていとなごり悲しく思ひて、漏り濡れたる廂の端つ方おし拭はせて、ここかしこの御座ひきつくろひはせなどしつ

つ、例ならず世づきたまひて、亡き人を恋ふる袂のひまなきに荒れたる軒のしづくさへ添ふ

も心苦しきほどになむありける。

（蓬生巻 345 頁）

長年頼りになってくれた侍従さえ自分のもとを離れ、更に不安で心細く感じる。昼寝の夢に亡き父親を見、目が醒めると、「亡

き人を恋ふる袂のひまなきに荒れたる軒のしづくさへ添ふ」と思わず歌を詠じる。父親恋しさの涙に雨漏りが加わり、袂がさらに濡れてしまう。悲しみと貧乏のつらさが重なり、自分が絶望に追い込まれた心境を十分に表した。そのような状況に身をおいた末摘花は「例ならず世づきたまひて」といつもと違い、世間並みの様子で、思わず詠じた歌も人並みの歌である。

その時、光源氏をついに末摘花のもとへ寄り、末摘花が自分を待ち続けていることを知り、「今までとはざりけるよ」（蓬生 347 頁）と自分の薄情を反省し、「たづねてもわれこそとはめ道もなく深き蓬のものと心を」（蓬生 348 頁）と末摘花の変わらぬ心に感動する。源氏は末摘花と対面し、次のように和歌を唱和している。

藤波のうち過ぎがたく見えつるはまつ
こそ宿のしるしなりけれ

（蓬生巻 351 頁）

年をへてまつしるしなきわが宿を花の
たよりにすぎぬばかりか

（蓬生巻 351 頁）

「まつ」に「松・待つ」にかけて、源氏の歌の「まつ」「しるし」「宿」を詠み込み、源氏をひたすら待っていた辛さを表し、女の応答らしい詠みぶり、源氏に「昔よりはねびまさりたまへるにや」（蓬生巻 351 頁）と思わせた。

以上分析したように、末摘花巻と蓬生巻間の末摘花の人物造型において二点の変化が見られる。まず一点目は、末摘花巻における内気で、「世づかぬ」「ものづつみ」と評価された末摘花が、蓬生巻にいたると、侍従との別れに際しては多弁で、そして

度々の叔母の誘いに応じず、父親が残した邸を守り、ひたすら源氏を待っていると描かれている点である。「例ならず世づきたまひて」（蓬生 345 頁）見えたのである。そして二点目は、末摘花巻では、末摘花は人並みの返歌ができず、古めかしい返歌で源氏を苦笑させたが、蓬生巻では人並みの歌を作るようになった点である。

ところが、蓬生巻における末摘花の内気で一途な性格、貧乏な生活、生活態度などは末摘花巻と一貫性がある。末摘花が源氏と対面する時遠慮深いところは蓬生巻にも「うれしけれど、いと恥づかしき御ありさまにて対面せんもいとつつましく思したり」（蓬生 349 頁）「例の、いとつつましげに、とみにも答へきこえたまはず」（蓬生 350 頁）と言及される。蓬生巻に描かれた末摘花の貧しさは、末摘花巻にも「いといたう荒れわたりてさびしき所に」（末摘花 269 頁）「浅茅分くる人も跡絶えたるに」（末摘花 279 頁）と描かれる。蓬生巻では末摘花は強い意志で父親が残した調度と邸を守ったと描かれる。末摘花巻にも「故常陸の親王の末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御むすめ」（末摘花 266 頁）、「父親王おはしけるをりにだに、古りにたるあたりとておとなひきこゆる人もなかりける」（末摘花 278 頁）とあり、末摘花の生活態度は父親の教育と関わるのが窺える。しかも、「几帳など、いたくそこなはれたるものから、年経にける立処変わらず、おしやりなど乱れねば」（末摘花 289-290 頁）と末摘花が父親の調度をきちんとしていることは末摘花巻にも言及される。このように、末摘花は、根

本的なところは変化しておらず、蓬生巻では悲しみと絶望に追い込まれたからこそ、強い意志が表出されたと思われる。次の節では中国古典文学における「賢女」の話と末摘花の物語を比較しながら、末摘花の変貌問題を分析する。

3.2 中国古典文学における「醜女」かつ「賢女」

第1章に述べた中国古典文学における「醜女」の話の中でもふれたが、中国古典には「醜女」かつ「賢女」の物語が少なくない。そのような話と末摘花の物語とを比較し、末摘花の変貌と人物造型方法を比較文学的視点から分析したい。

『列女伝』において、「齊鍾離春」「齊宿瘤女」「齊孤逐女」などの「醜女」かつ「賢女」の物語が語られている。これらの女性の醜貌描写は第一章に詳述したので、ここでは贅言しない。鍾離春は「醜女」であるが、宣王の政治を諫め、立派な発言をした。この話は『蒙求』の「無塩如漆」に収録されている。しかし、鍾離春は賢く、宣王の統治を助けたと描かれ、末摘花の人物像とは若干相違がある。ここでは『列女伝』における宿瘤女の物語を取り上げて、比較してみたい。

宿瘤女者、齊東郭採桑之女、閔王之后也。項有大瘤、故號曰宿瘤。初閔王出遊、至東郭。百姓盡觀、宿瘤女採桑如故。王怪之、召問曰。「寡人出遊、車騎甚衆。百姓無少長、皆棄事來觀、汝採桑道旁、曾不一視、何也。」對曰、「妾受父母教採桑、不受教勸大王。」王曰、「此奇女也。惜哉、宿瘤」。女曰、「婢妾之職、屬之不二、予之不忘。中心謂

何。宿瘤何傷」。王大悅之曰、「此賢女也」。命後車載之。(中略)對曰、「『性相近、習相遠也』。昔者、堯・舜・桀・紂俱天子也。堯・舜自飾以仁義。雖爲天子、安於節儉、茅茨不翦、采椽不斲。後宮衣不重采、食不重味。至今數千歲、天下歸善焉…」

(卷六 辯通傳 715—717 頁)

宿瘤女は閔王が出遊した時、人々がみんな見物しに行ったが、彼女は普段のように桑を摘んでいた。まわりの人と宿瘤女の行動が対照的になっている。源氏が末摘花のもとへ訪ねた場面でも、「若き人二三人あるは、世にめでられたまふ御ありさまをゆかしきものに思ひきこえて、心げそうしあへり。よろしき御衣奉りかへ、つくろひきこゆれば、正身は、何の心げさうもなくしておはす」(末摘花 282 頁)と「若女房」と末摘花が源氏に対する反応が対照的になっている。閔王が原因を尋ねると、「妾は父母から桑の葉を採めといいつかりましたが、大王さまを拝観せよとはいいつかりませんでした」と答えた。宣王が「賢女」だと思い、后にした。親から任された仕事に専念し、世間に流されないという一途なところは末摘花と共通する。蓬生巻では、貧しさを耐え難い「女房」たちが調度を売ろうと勧めたが、末摘花は「亡き人の御本意違はむがあはれなること」(蓬生巻 329 頁)と言い、父常陸宮の遺志を守る。「親のもてかしづきたまひし御心おきてのままに、世の中をつつましきものに思して」(蓬生巻 331 頁)と、末摘花のつつましい性格は親の教訓を墨守しているうちに形成されたのである。末摘花の「孝」という美德

は末摘花も宿瘤女も同じである。

宿瘤女は着飾らないまま宮廷に入って笑われたが、歴代の皇帝の例を挙げながら、質素儉約の重要性を諫めた。末摘花の衣装の古めかしさは末摘花巻から初音巻まで描かれている。しかし、蓬生巻において、末摘花がますます貧しくなった家を守り、貧窮に耐えていることが肯定的に捉えられている。質素儉約という美質は末摘花と宿瘤女と共通しているところである。

『後漢書』逸民伝に後漢の梁鴻の妻孟光の話が語られている。第1章に詳述したように、容貌が醜い女性である。梁鴻という有名な賢者に嫁いだ。着飾って嫁入りした孟光に対して「わしはぼろを着て一緒に山奥に侘住居できる女が欲しかったのだ。それにそなたは今、綺羅びやかな絹物を着、白粉眉墨をつけている。そんな女はわしの望みではない。」と言った。孟光がそれを聞くと、孟光は「そこで改めてひつつめの髪に結い、木綿の着物を着、糸と針を手にして進み出た」(291頁)。二人は覇陵山に入って「誦書弹琴」の隠遁生活を送る。

新間一美氏は孟光と末摘花の共通点について、「醜いこと、貧しいこと、節操のあること、書を読むこと、琴を弾くこと、『裘』を着る女性であることなどである」「醜い『女貧士』として末摘花は孟光の性格を受け継いでいるように見える」²²と述べている。孟光の話では宿瘤女の話と同じく、着飾った妻よりも「裘褐」を着る人を妻にするべきであるという価値観が見て取れる。末摘花は貧窮に耐えて、世間と接触せず、隠居のような生活を送っている点で孟光と類似する。

また、『全唐詩』395巻に醜婦が描かれている詩が記録されている。

劉又 「古怨」

君莫嫌醜婦

醜婦死守貞

山頭一怪石

長作望夫名

鳥有並翼飛

獸有比肩行

丈夫不立義

豈如鳥獸情²³

この詩は閨怨詩風の詩題で、具体的に誰の話であるかは論じられていない。冒頭で「醜女」が主人公に設定され、醜婦が死して貞を守りながら夫を待ち続ける。男性は女性の誠実に答えないと「豈如鳥獸情」と鳥獸にも劣るとされる。男性の不誠実さを批判しながら、男性に対して女性に誠実であるよう呼びかける。蓬生巻にそれと類似する描写がある。

あはれに心深き契りをしたまひしに、わが身はうくて、かく忘れられたるにこそあれ、風の伝てにても、我かくいみじきありさまを聞きつけたまはば、かならずとぶらひ出でたまひてん、と年ごろ思しければ、おほかたの御家居もありしよりけにあさましけれど、わが心もて、はかなき御調度どもなども取り失はせたまはず、心強く同じさまにて念じ過ごしたまふなりけり。

(蓬生巻 336頁)

源氏と約束したのでかならずいつか訪ねてくるという末摘花の心中である。そして、貧しさの中辛抱強く堪え忍んでいる末摘花の姿が描かれている。また、源氏と再会し

た時、「年をへてまつしるしなきわが宿を花のたよりにすぎぬばかりか」（蓬生巻 351 頁）と自分が長い年月源氏を待ち続けた気持ちを表し、源氏の薄情を責めている。「待つ」という不変の心は末摘花の平安時代の女性としての美德の一つではないか。

さらに、『世説新語』の「賢媛」編に阮氏という女性の話がある。

許允婦、是阮衛尉女、徳女妹。奇醜。交礼竟、允無復入理、家人深以為憂。会允有客至。婦令婢視之、還答曰、是桓郎。桓郎者桓範也。婦云。無憂、桓必勸入。桓果語許云。阮家既嫁醜女与卿。故当有意。卿宜察之。許便回入内、既見婦、即欲出。婦料其此出、無復入理、便捉裾停之。許因謂曰、婦有四徳、卿有其幾。婦曰、新婦所乏唯容耳。然士有百行、君有幾。許云。皆備。婦曰、夫百行以徳为首。君好色不好徳。何謂皆備。允有慚色。遂相敬重。²⁴

許允は自分の嫁が醜いので、顔を見るなり部屋を出て行こうとしたが、阮氏は許允の裾をとらえて引き止めた。許允が「婦に四徳有り、卿は其の幾が有りや」と聞いたところ、「新婦の乏しき所は唯容のみ」と答えた。さらに「士に百行有り、君は幾ばく有りや」と夫に反問した。許允が「皆備はれり」と答えたところ、「百行は徳を以て首と為す。君は色を好んで徳を好まず。何ぞ皆備はれり」と許允を強く批判した。これにより妻を尊敬するようになったという。

「四徳」とは婦徳・婦言・婦容・婦功である。阮氏は自分は容貌が美しくないが、

徳を持っていると強調した。「婦容」を備えていないことは末摘花にも通じている。更に阮氏は夫の「好色不好徳」を批判し、徳が一番重要であると強調した。

源氏が末摘花の正体を見るなり、驚いて失望したのは許允と同じである。そして、末摘花の徳と言えば、親の教訓を墨守すること、貧しさを耐えること、辛抱強く源氏を待ち続けること、誠実さ、質素さなどがある。末摘花巻において末摘花の内気な性格、古めかしい歌と衣装が源氏を苦笑させたが、蓬生巻においては源氏は末摘花が貧しさの中自分を待ち続けている姿に感動した。末摘花の物語でも「好色不好徳」を批判し、「徳」を強調しているのではないか。

「好色」か「好徳」かの問題は『源氏物語』においてしばしば論じられている。まず、雨夜の品定めに左馬頭が言った言葉である。

今は、ただ、品にもよらじ、容貌をばさらにも言はじ、いと口惜しくねぢけがましきおぼえだになくは、ただひとへにもものまめやかに静かなる心のおもむきならむよるべをぞ、つひの頼みどころには思ひおくべかりける。

（帚木 65 頁）

女性は身分と容貌で評価することはできないという。そして、蓬生巻にこのような描写がある。

かの花散里も、あざやかにいまめかしうなどははなやぎたまはぬ所にて、御目移しこよなからぬに、咎多う隠れにけり。

（蓬生巻 352 頁）

これは源氏が自分を待ち続けた末摘花に

対する感動深さを表している。末摘花は花散里と同じく、徳が重視されたため、醜女というイメージが薄れ、花散里と遜色ないように評価される。前述した中国古典における賢女の話はすべて醜貌を冒頭に描いてから、女性の美德を述べ、男主人公は女主人公の美德を気づき、心を惹かれている。そのように、醜貌から徳へ物語の重心が移行している。女性を評価する時に容貌によるのではなく、徳によるべきであるという主題が窺える。その主題を強調するため、女主人公をひたすら醜く描いたと思われる。

『淮南子』説山訓で、「媼母有所美、西施有所醜」（醜女の媼母も、美しなる行有り、美人の西施も、醜なる行有り）²⁵と述べている。容貌が醜いが、徳を備えた女性であるという。また、同じく説山訓に「求美則不得美、不求美則美矣、求醜則不得醜、求不醜則有醜矣、不求美又不求醜、則無美無醜矣」（美を求むれば美を得ず、美を求めざれば美なり、醜を求むれば醜を得ず、醜ならざるを求むれば、醜有り、美を求めず、醜を求めず、斯くすれば美も無く、醜も無し）（168頁）と書かれている。人間は絶対的な美と醜はなく、容貌が美しくない人でも徳があるから美しく見える。美貌ではなく美德を備える女性を后にするべきだという主題である。

末摘花の物語には、そのような重心の移行も見える。源氏は須磨での辛い体験を経て、蓬生巻において末摘花の誠実さの貴重さに感動し、末摘花を庇護していく。そのため、末摘花その人が変貌したのではなく、物語の主題を引き出すために、「醜女」か

ら「賢女」への要素を中心に描いたのだと考えられる。末摘花の物語と中国古典文学における「賢女」の話と共通性があることがわかる。

おわりに

本論は比較文学的視点から、本文を辿りながら、末摘花の人物造型と中国古典文学との共通性を論じた。

末摘花巻における末摘花の容貌描写を分析し、『源氏物語』における他の女性の容貌描写と比較し、末摘花の容貌がかなり異様であることがわかった。そして、『源氏物語』以前の日本古典文学を辿ると、醜貌描写が少ないことがわかる。唐代に至る中国古典文学における醜貌描写と比較し、両者が類似している部分が多いと判明したため、末摘花の異様な風貌は中国古典文学と共通性があると考えられる。しかし、一つ重要な相違点がある。末摘花巻には末摘花の容貌が異様に描かれている一方、髪は非常に美しく描写されている。そして、蓬生巻以降では、末摘花の「醜女」の要素が薄れ、髪が容貌描写の中心となった。

『源氏物語』におけるほかの女性の髪描写との比較によって、末摘花巻の髪の描写だけは、ほかの女性の髪描写に共通する美点として描かれていることを確認した。しかも、末摘花の髪は末摘花物語にわたって描かれている。そのような髪は特別な意味を持っている。『源氏物語』以前の髪描写を見ると、単なる女性の美をあらわす機能を持っている。しかし、『源氏物語』に至ると、髪描写が豊富になったほか、特別な

機能を持つようになった。紫の上と女三宮の髪描写の分析によって、女性の髪は物語の展開に伴い、異なる視点から捉えられることがわかる。

また女性の髪は男女の関係性と関わることも窺える。末摘花巻における末摘花の髪は長く、豊かで、美しく描かれている。その髪は彼女の高貴性をあらわし、また源氏が印象づけられた一因である。蓬生巻では、末摘花は自分のものを離れる侍従に自分の髪で作った髪を贈った。古くから別れの際に装束を贈る習慣がある。末摘花は泣いてばかりで、衣が涙で濡れてしまい、贈れなくなる。そのような状況における末摘花は人にほこれる綺麗な髪を拾い、鬢を作って贈ったのである。それは長年仕えてくれた侍従に対して末摘花の精一杯の気持ちである。この髪は末摘花の誠実さと一途な性格を表した。初音巻では、末摘花の髪が少なく、白くなったと描かれている。その時の容貌を源氏は見るとも忍びない。しかし、末摘花は全くそれに気づかず、源氏の変わらぬ心に安心し、心から頼りに思っている。そのような末摘花は「世のつねならぬ」とほかの女性と違うところがある。唯一美しいところであった髪さえ衰えたが、源氏はやはり彼女を見捨てることができない。それは末摘花が誠実さと質素さなどの美德を備えているからである。容貌によらず、「徳」によって源氏が末摘花を評価している。

そして、末摘花の容貌描写だけでなく、性格、詠歌についての描写も変化した。末摘花巻と蓬生巻間の末摘花の人物造型において二点の変化が見られる。一点目は、末摘花巻における内気で、「世づかぬ」「もの

づつみ」と評価された末摘花は、蓬生巻にいたると、侍従との別れに際しては多弁で、そして度々の叔母の誘いに応じず、父親が残した邸を守り、ひたすら源氏を待っていると描かれている点である。二点目は、末摘花巻には、末摘花は人並みの返歌ができず、古めかしい返歌で源氏を苦笑させたが、蓬生巻には人並みの歌を作るように描かれた点である。しかし、蓬生巻における末摘花の内気で一途な性格、貧乏な生活、生活態度などは末摘花巻と一貫性がある。

さらに、蓬生巻の描写と中国古典文学における「賢女」の話とを比較すると、類似点が非常に多いことがわかる。末摘花の物語と中国古典文学における「賢女」の話には共通性があることがわかる。中国古典文学における「賢女」の話において、女主人公の醜貌から徳へ物語の重心が移行している。女性を評価する時に容貌によるのではなく、徳によるべきであるという主題が窺える。その主題を強調するため、女主人公をひたすら醜く描いた。そのような「賢女」の話のパターンと対照して、末摘花の変貌問題も解釈できる。末摘花巻と蓬生巻間の末摘花人物造型の変化は、末摘花本人が変わったのではなく、両巻の描写方法が異なったからである。各巻における末摘花の人物像は多角的に描かれ、「醜女」の要素と「賢女」の要素がそれぞれに末摘花巻と蓬生巻に強調されるからである。また、各巻に共通するテーマがある。それは「好色不好徳」を批判していることである。このように、末摘花の物語は一貫性を持つように読解できる。

註

- 1) 以下本稿における『源氏物語』本文の引用は『新編日本古典文学全集 23 源氏物語』(阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳者、小学館、1996年)による。巻数と頁数は括弧内に示す。
- 2) 蔵中しのぶ、「普賢菩薩と普賢菩薩の乗物」、『源氏物語の鑑賞と基礎知識 13』。至文堂、2000年、159頁
- 3) 永井和子、「末摘花覚え書き—異文化の体験者として—」、『国語国文論集 25号』。学習院女子短期大学国語国文学会、1996年、16頁
- 4) 田中隆昭、「滑稽譚から賢女伝へ—末摘花の物語—」、『交流する平安朝文学』。勉誠出版、2004年、282頁
- 5) 神尾暢子、「美的語彙と源語女性—毛髪規定の表現機能—」、『日本語学 7—11号』。明治書院、1998年、28頁
- 6) 吉井美弥子、「『源氏物語』の『髪』へのまなざし」、『読む源氏物語 読まれる源氏物語』。森話社、2008年(初出:『源氏物語と源氏以前 研究と資料—古代文学論叢 13』所収 武蔵野書院 1994年) 96頁
- 7) 三田村雅子、「黒髪の源氏物語—まなざしと手触りから—」、『源氏研究』。翰林書房、1996年、61頁
- 8) 小島憲之 [ほか] 校注・訳、『新編日本古典文学全集 2 日本書紀 1』。小学館、1994年
- 9) 以下本稿における『古事記』本文の引用は『新編日本古典文学全集 1 古事記』(山口佳紀・神野志隆光校注・訳、小学館、1997年)による。巻数と頁数は括弧内に示す。
- 10) 以下本稿における『落窪物語』の本文の引用は『新編日本古典文学全集 17 落窪物語 堤中納言物語』(三谷栄一・三谷邦明・稲賀敬二校注・訳、小学館、2000年)による。巻数と頁数は括弧内に示す。
- 11) 以下本稿における『列女伝』本文または訳文の引用は『列女伝 下』(山崎純一編、明治書院、1997年)による。
- 12) 以下本稿における『後漢書』本文または訳文の引用は『中国古典文学大系 第13巻漢書・後漢書・三国志列伝選』(本田濟編、平凡社、1968年)による。
- 13) 高橋忠彦編、『新釈漢文大系第81巻 文選(賦篇)下』。明治書院、2001年、361～362頁
- 14) 入矢義高編、『中国古典文学大系 第60巻 仏教文学集』。平凡社、1975年、22頁
- 15) 入矢義高編、『中国古典文学大系 第60巻 仏教文学集』。平凡社、1975年、91頁
- 16) 飯田吉郎編、『白行簡大楽賦』。汲古書院、1995年、31頁
- 17) 以下本稿における『竹取物語』の本文の引用は『新編日本古典文学全集 12 竹取物語』(片桐洋一校注・訳、小学館、1994年)による。
- 18) 以下本稿における『うつほ物語』の本文の引用は『新編日本古典文学全集 16 うつほ物語』(中野幸一校注・訳、小学館、1996年)による。巻数と頁数は括弧内に示す。
- 19) 湯原美陽子、『王朝物語文学における容姿美の研究』。有精堂、1998年、44、54頁
- 20) 吉井美弥子、「源氏物語の『髪』へのまなざし」、『読む源氏物語 読まれる源氏物語』。森話社、2008年、95頁
- 21) 山本利達、「作者の人間理解—末摘花を中心に—」、『源氏物語の探求第十巻』。風間書房、1985年
- 22) 新聞一美、「源氏物語の女性像と漢詩文—帚木三帖から末摘花・蓬生巻へ—」、『中古文学と漢文学Ⅱ』。汲古書院、1987年、168頁
- 23) [清] 彭定求編、『全唐詩・中』。中州古籍出版社、1996年、2419頁
- 24) 竹田晃・黒田真美子編、『中国古典小説選 3 世説新語』。明治書院、2006年、245頁
- 25) 早稲田大學編輯部編、『漢籍國字解全書淮南子下』。早稲田大學出版部、1917年、187頁

参考文献

- [1] 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳者. 『新編日本古典文学全集 23 源氏物語』. 小学館. 1996 年
- [2] 蔵中しのぶ. 「普賢菩薩と普賢菩薩の乗物」. 『源氏物語の鑑賞と基礎知識 13』. 至文堂. 2000 年
- [3] 永井和子. 「末摘花覚え書き—異文化の体験者として—」. 『国語国文論集 25 号』. 学習院女子短期大学国語国文学会. 1996 年
- [4] 田中隆昭. 「滑稽譚から賢女伝へ—末摘花の物語—」. 『交流する平安朝文学』. 勉誠出版. 2004 年
- [5] 神尾暢子. 「美的語彙と源語女性—毛髪規定の表現機能—」. 『日本語学 7—11 号』. 明治書院. 1998 年
- [6] 吉井美弥子. 「源氏物語の『髪』へのまなざし」. 『読む源氏物語 読まれる源氏物語』. 森話社. 2008 年
- [7] 三田村雅子. 「黒髪の源氏物語—まなざしと手触りから—」. 『源氏研究第 1 号』. 翰林書房. 1996 年
- [8] 小島憲之 [ほか] 校注・訳. 『新編日本古典文学全集 2 日本書紀 1』. 小学館. 1994 年
- [9] 山口佳紀・神野志隆光校注・訳. 『新編日本古典文学全集 1 古事記』. 小学館. 1997 年
- [10] 三谷栄一・三谷邦明・稲賀敬二校注・訳. 『新編日本古典文学全集 17 落窪物語 堤中納言物語』. 小学館. 2000 年
- [11] 山崎純一編. 『列女伝 下』. 明治書院. 1997 年
- [12] 本田濟編. 『中国古典文学大系第 13 卷. 漢書・後漢書・三国志列伝選』. 平凡社. 1968 年
- [13] 高橋忠彦編. 『新釈漢文大系第 81 卷 文選 (賦篇) 下』. 明治書院. 2001 年
- [14] 入矢義高編. 『中国古典文学大系 第 60 卷 仏教文学集』. 平凡社. 1975 年
- [15] 飯田吉郎編. 『白行簡大楽賦』. 汲古書院. 1995 年
- [16] 片桐洋一校注・訳. 『新編日本古典文学全集 12 竹取物語』. 小学館. 1994 年
- [17] 中野幸一校注・訳. 『新編日本古典文学全集 16 うつほ物語』. 小学館. 1996 年
- [18] 湯原美陽子. 『王朝物語文学における容姿美の研究』. 有精堂. 1998 年
- [19] 本田和子. 「『振り分け髪』の抄」. 『少女浮遊』. 青土社. 1986 年
- [20] 山本利達. 「作者の人間理解—末摘花を中心に—」. 『源氏物語の探求第十卷』. 風間書房. 1985 年
- [21] 森一郎. 「源氏物語における人物造型の方法と主題との連関」. 『「主題」論の過去と現在』. 勉誠出版. 2008 年 (初出: 「国語国文」 34—4 号. 中央図書出版社. 1965 年)
- [22] 新聞一美. 「源氏物語の女性像と漢詩文—帯木三帖から末摘花・蓬生巻へ—」. 『中古文学と漢文学 II』. 汲古書院. 1987 年
- [23] [清] 彭定求編. 『全唐詩・中』. 中州古籍出版社. 1996 年
- [24] 竹田晃・黒田真美子編. 『中国古典小説選 3 世説新語』. 明治書院. 2006 年
- [25] 早稲田大學編輯部編. 『漢籍國字解全書淮南子下』. 早稲田大學出版部. 1917 年